事例 1

自ら学ぶ力、考える力を支援する図書館づくり

東京女子大学

東京女子大学は、図書館を従来の資料・情報を提供する場から、学生の学びを支援する場へと変えようという考えのもと、2007年から新しい取り組みを始めた。学生のニーズをくみ取り、他部署との連携を図って体制を整えた結果、新しいタイプの大学図書館として注目を集めている。自ら学ぶ力・考える力を伸ばすことにつながった図書館の取り組みを紹介する。

図書館利用を促し学びの質を高める

東京女子大学では、少人数教育のもと、ディスカッションや研究発表などを取り入れた演習形式の授業が多く行われている。そのため学生は、図書館の資料等を利用して、事前準備に多くの時間を割くことが不可欠となる。

だが、図書館の利用者数は年々減少傾向にあった。理由は大きく2つ。1つは、自ら学ぶ学習習慣・態度が身に付いておらず、豊富な図書資料を十分に活用できない学生が増えているということ。

もう1つは、施設・設備面での課題だ。館内には学生がグループワークを行えるスペースが限られていた。パソコンはOPAC（オンライン蔵書目録）検索のみを目的に設置され、レポートの作成等には活用できなかった。

そこで打ち出されたのが「滞在型図書館」というコンセプトだ。「学生が図書館に長時間滞在し、一連の学習活動をすべて館内で行えるよう施設・設備を整えるとともに、図書館の資源を有効に活用してより質の高い学びをしてもらうためのサポート体制を充実させる必要があると考えた」と兼若逸之図書館長は語る。

この計画は、「マイライフ・マイライブラリー：学生の社会的成長を支援する滞在型図書館」として文部科学省の学生支援GP（2007～2010年度）に選定され、一気に動き出した。プログラムの構想を練り、運営を担う委員会のメンバーには図書館長・職員のほか、情報処理センター長、キャリア・センター長、学生委員長も加わり、全学的な取り組みとしてスタートした。

学び合いの場として図書館全体が活性化

施設・設備面については、1階を全面的に改修。48台のパソコンを設置した「メディアスペース」では、検索だけでなく論文やレポートの作成に取り組めるようになった。

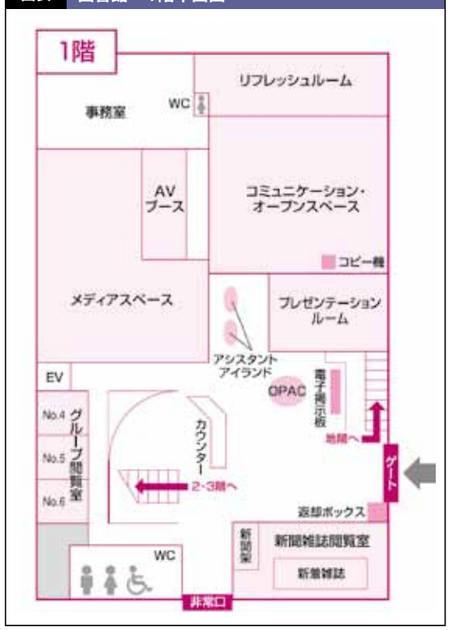
「コミュニケーション・オープンスペース」は、グループ学習を想定して設置。机や椅子の配置を自由に換えることができ、貸し出し用ノートパソコンを使って論文作成等ができる場にもなっている。

「プレゼンテーションルーム」は、プレゼンの際に必要な各種設備・機器を完備しており、ゼミでの発表や準備、図書館主催の初年次学習支援講習や情報リテラシー講習等に利用している。プレゼンテーションルームを設置したのは、普段図書館になじみのない学生が、この部屋の利用をきっかけに館内の雰囲気を知り、利用のハードルを下げるねらいがあった。館内であれば、書架の図書資料を研究発表に活用しやすいというメリットもある。

1階の特徴は、「図書館は静寂であるべき」という既成概念にとらわれず、学生が仲間と活発に議論ができる環境を提供している点だ。その結果、図書館が調べ物や読書の場としてだけでなく、学生同士の学び合いの場としても機能することになった。

橋本春美図書館課長は、「1階の改修によって、ほかのフロアの利用も活性化した」と語る。論文やレポートを作成するときには、紙情報と電子情報の両方の活用が不可欠である。1階でパソコンを使って論文を書いているときにも、必要に応じてほかのフロアから関連書籍を持ち出し、再び1階に戻って、ネットと書籍の両方の情報を参照しながら取り組む、といった姿が日常的に見られるようになったという。単に滞在するのではなく、学習するために滞在する図書館へと生まれ変わった。

図表 図書館 1階平面図



学生スタッフの活用で学生視線による改善も

図書館内の施設・設備や資料を活用するうえで、欠かせない役割を担っているのが、学生アシスタントである。

従来、返本作業のために学生アルバイトを採用していた。学生が目当ての蔵書を探せないとき、以前にも図書館職員ではなく、学生アルバイトに質問する姿が見られた。学生同士の気軽さがあるのだろう。その姿が印象に残り、アシスタントには学生を採用した。学生視線による改善ができるという考えもあった。

学部の学生が論文やレポートを作成する際に、図書館資料を活用した書き方などについて大学院の学生が相談に乗る「学習コンシェルジェ」、パソコンの操作説明やトラブル対応を行う「システム・サポーター」など、4種類の学生アシスタントによるサポート体制を整えている。

学生アシスタントのしくみは、サポートする側、される側の双方にメリットがある。一般学生をサポートするには、まず学生アシスタント自身が図書館の利用方法に精通する必要がある。そして、一般学生に有効に活用してもらうために必要なサポートとは何かを互いに考え、議論し、改善策を図書館職員に提案する。次第に課題を見出す力、それを解決する力が身に付いていくという。

一般学生は、学生アシスタントから図書資源の見つけ方、活用方法を学ぶ。東京女子大学は演習形式の授業が多く、課題もよく出されるため、調査や発表の練習が欠かせない。図書館をうまく使いこなせれば、授業に適応でき能動的に取り組めるようになる。「学力の向上に直接結びついているかどうかの検証は難しいが、図書館の利用を通して自ら学ぶ力・考える力が培われているのではないか」と橋本課長は言う。

図書館では、ほかにも学びを支援している。「情報検索ガイダンス」や「基本的なレポートの書き方ガイダンス」などの情報リテラシー講習だ。図書館利用の知識が浅い新入生や、卒論を控えて本格的に図書館を利用し始める3年生を対象に、職員と学習コンシェルジェが講師を務める。

「大学の学習では、自分で課題を発見し、調べ、考え、表現することが大切であり、そのためには図書館の利用が不可欠になる」ことを学生に意識付けることによって、利用を促すとともに、利用の質を高めることがねらいだ。この講習を、授業に組み入れている教員も多く、互いに協力し合っている。

蔵書という資源、プレゼンテーションルームなどの施設、教員・学生のサポートという人材、これらすべてを融合できるのが図書館であるという考えに基づいた学びの支援が実行されたといえる。

従来の資料・情報提供の場から、学生の学びを支援し、深める場へと、大きく変化した。兼若館長は「本学図書館は、次のステージをめざす段階にある」と語る。

「本学の学生は、教員から与えられた課題については、時には1人で、時には互いに協力しつつ、図書館の資源を有効に活用して取り組む力を身に付けてきたように思う。図書館側もそうした力を育成するための支援体制を整えてきた。次に求められるのは、与えられた課題をこなすだけではなく、自らの問題意識に基づいて課題を発見し、解決する力を培うこと」。現状に満足せず、次の一歩をどう踏み出すか、検討している。